九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

九州大学蔵『知顕集』について

藤島, 綾
九州大学大学院（修士課程）

https://doi.org/10.15017/11900

出版情報：語文研究. 73, pp.55-65, 1992-06-07. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

九州大学蔵『知顕集』について

藤島　綾

伊勢物語注釈史上初の学究的研究書と称される『愚見抄』を、一条兼良は既存の『十巻の抄』及び『知顕集』を批判することから始めた。当時には「随分の奥義とのみ思」われ、「大納言経信卿の筆作とつたへ」られることで強い影響力を誇っていたであろう両書を真っ向から批判したこの記事には、兼良の自説に対する自信のほどがうかがえよう。事実、この『愚見抄』が後世の『伊勢物語』注釈に与えた影響は大きかった。とりわけ、近世における『伊勢物語』注釈は『愚見抄』の所説をしばしば踏襲したが、それとともに兼良がみせた『知顕集』への非難もくりかえされ、当時の『知顕集』観を形成する上で中心的役割を担うことになる。(2)

このような『愚見抄』の『知顕集』批判の影響を最大に受けたのが、近世初期の歌学者達であり、彼らがあらわした『伊勢物語』注釈書であった。北村季吟は『伊勢物語拾穂抄』に、

伊勢物語にむかしは知顕抄など古注有て、段々にあやしき説をつけ、此女は誰、この人は何人などしるして信用しがたき事のみありしを、一条の禅閤御所兼良公号三後成恩寺一古註を見やぶ

一

伊勢物語の末書に知顕集といふは、大納言経信卿の筆作といひつたへたり。其にはあらで又十巻の抄世間に流布せり。誰人のしわざともしらず。相伝の家訓には、随分の奥義とのみ思へり。ひそかに是を披見するに、来歴ども引のせたる和漢の書典、一としてまことある事なし。昔物語の本意をうしなふのみならず、詞花言葉のたよりにもなりがたし。末学のともがらゆめ〳〵信用すべからず。邪路におもむかん事うたがふべからず。次に彼知顕集に、業平中将は馬頭観音、小野小町は如意輪観音の化身といへり。其外うろむなる事のみなり。これは、後世に色好みの人の此道のかたうどにせんために、経信卿の名をかりて擬作せるにやとおぼえ侍る。まことに彼卿の筆ならば、定家卿は見給ぬ事はあるまじきを、物語の名をはじめとして、一事もちゐたる事みえ侍らず。いとおぼつかなき事也。故に此抄にもかならずしも規模とはせざる者也。　（『伊勢物語愚見抄』）(1)

りて、更に新注をなして愚見抄をあらはし給へり。[3]

と述べ、「あやしき説をつけ」た「知顕抄など古注」を退け、「新注」を作り上げた兼良の功績を讃えている。

ところが、やがて、別の新たな動きもでてくる。国学者達が『伊勢物語』を彼らの歌学から古典学への研究対象として捉えたことが転機となった。近世初期の歌学者たちが彼らの『知顕集』評価を『愚見抄』に全面的に依拠していたのに対し、国学者たちの間には『知顕集』にも『伊勢物語』研究の上で取るべきものはあると考え、それに言及する者達があらわれたのである。たとえば、文化九年の自序を持つ藤井高尚『伊勢物語新釈』は、その序で、

また同じ所（筆者注　屋代弘賢）にて、知顕抄のふるきうつしまきにまれ〳〵によき事ありきとて、清水浜臣のかきとゞめおきて見せけるなど、こたびひとつにとりならべて見わたして、すこしにてもまされるかたにつきてさだめたる此本ぞ。[4]

と述べ、当時、清水浜臣や屋代弘賢などの国学者達に『知顕集』を見直す動きがあったことを伝えている。このような状況の中で、『伊勢物語新釈』のほかにも『参考伊勢物語』（文化十四　屋代弘賢）『伊勢物語箋』（文化元　橘守部）が「知顕抄」の所説を引用、あるいは本文の校合に用いている。[5]

本稿で紹介する九大附属図書館蔵本『知顕集』（以下九大本と略称）[6]が書写されたのは、このような『知顕集』見直しの動きに先立つ宝暦十二年のことである。

ところで、『知顕集』の本文は、『伊勢物語古註釈の研究』（大津有一氏）において、鎌倉期には成立していたと考えられる三条西家本系統と近世の写本のみを伝える続群書類従本系統、さらにその中間に位置する本文を伝えた保阪本系統の三つに大別されたが、その後、『日本古典文学大辞典』（片桐洋一氏執筆）では、書陵部本系統と続群書類従本系統の二つにまとめられ、今日ではこれが一般的見解となっている。九大本は、そのうち続群書類従本系統に属す。この系統の本文は、現在では続群書類従本および片桐洋一氏によって翻印されたいわゆる島原文庫本[8]の二本が公刊されている。すでに指摘があるように、この二本は本文の誤脱がほぼ一致していることから、書写過程において非常に近い関係にあったと思われる。[9]ところが、ここに紹介する九大本は、これら続群書類従本、島原文庫本の二本には見出せない記述がいくつか存在する点で、きわめて興味深い。以下、本稿では、九大本とすでに公刊されている同系統二本のうち島原文庫本との本文比較をとおして、九大本の実態を示す。

二

続群書類従本系統『知顕集』のうち、島原文庫本については、片桐洋一氏がその脱落と判断される箇所をすでに指摘している。[10]まず、この部分を九大本と比較してみた。その結果、島原文庫本で大幅な脱落と思われるのは次の二箇所である。[11]

一つは、和歌の六体について述べた序文の記事である。島原文庫本は、

まづたんかといふを一しゆとさだむる也。かるがゆへに、たんかといふて、これには、かみしものくもさだめず、いはんや五だいごこんとあたること也。このうたのすがたは、いくつのくをかぎるともなし。たゞいくらにてあれ、いひつゞくるなり。つぎにちようかといふは、もんじを三十一じにさだめ、くを五くにわかつなり。五くといふは、さきにいひつるごとく、ち・すい・くわ・ふう・くうの（脱落カ）。六だいは、さとりのまへには、六だうのほうほつじんぶつとあらはれ、まよひのまへには、ぢごく・がき・ちくしやう・しゆらと、にんてんのちまたとなり、これをあてるときは、さかさまにあたるなるべし。

〔二〇一頁〕

と明らかに脱落している。一方、この部分に対応する九大本は、

先、短哥と云は、哥の句をふたつにさだめて、五七とも十二字を一首とさだむる也。故に短哥と云。是には上下の句もさだめず。いはんや五体五根とあつる事なし。此哥のすがたはいくつの句を限るともなし。たゞいくらにてもあれ、いゝつゞくるなり。

次に、長哥と云は、哥の文字を三十一字にさだめ、句を五句にわかつ也。五句と云は、さきにいゝつるがごとく、地、水、火、風、空の五輪也。其すがたは、

梅の花それとも見へず久かたのあまぎる雪のなべてふれゝば

と云り。第一の五文字をば頭句と云。是は空也。第二の七文字をば首の句と云。是は風也。第三の五字をば胸の句といふ。是は火也。第四の七字をば腰の句と云。是は水也。第五の七字をば尾の句と云。是地也。是はおはりの句成べし。衆生の体にのぞむる時は、足の句などにあたる也。此長哥を三十二相になぞらへつる、真実の哥の本とは思べし。五句一の心ともにかけざれば、即五根五力の仏をつくる。百の哥を読ば、百の仏をつくる。千の哥をよめば、千の仏をつくる也。上句若難あれば頭の病と云、中句（本ノマヽ）に病あれば首の病と云、下句にたゝりあれば腰の病、尾の病と云。上下の句にわたりて不具なれば、腰をれ哥と云なり。故に心得ずしてあしき哥をよみつれば六根まつたからず、五体さだかならず、くるしみある衆生をつくるゆへに、いまだ輪廻をはなれぬ哥とかなしみて、能くさばくりなをすべき也。

次に、旋頭哥と云は、上句の外に五字にても七字にても句を一句よみぐせる也。たとへば、

此をかにかるおきな（イニおのこ）しかなかりそありつゝも君かきまさんみまくさにせん

とよめり。ありつゝもと云句をよみぐしたり。

次に、混本哥と云は、五句の内に五字にても七字にても一句よみたらざる也。たとへば、

ゆふかげまたでちりやすきたゞあさがほのはなのなぞかし

是はじめの句を一句よまざる也。

次、廻文哥と云は、三十十一字の哥をさかさまによむも、同心同詞よまるゝ成。たとへば、

むら草にくさのなはもしそなはらばなぞしも花のさくにさ

くらん
と云り。
次に、誹諧哥と云は、三十一字の哥の詞を狂じたはれたる心に読る也。たとへば、
人にあはんつきのなきよは思ひをきてむねはしり火に心やけおり
と云り。
これらの六体は、さとりのまへには六道の法身の仏とあらはれ、迷のまへには地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天のちまたとなる。是をあつる時にさかさまにあつる成べし。

と、和歌四首を含め大幅に補うことができる。

もう一箇所の島原文庫本における大きな脱落は、第二十三段、「白波」の説明である。島原文庫本が、

そのゆへは、むかし、たいこくに、二にんのぬす人の長本ありき。一にんは、くもはなたちはいろ（脱落）いこま山をだに、きみがゆくへ、そなたのやまとみるばかりと、よめり。

〔二四七頁〕

とのみ伝えるのに対し、九大本は、

其故は、むかし大国に二人の盗人の長本ありき。一人は山立の長本也。名をば緑林と云。一人は海賊の長本也。名をば白波と云。但、緑林は山にては手もきゝ心もきゝたりけるが、里海に出ては心もきかざりけり。しら波は海にても里にてもゆゝしき長本なりければ、これよりして盗人の惣名を白波と云なり。しら波と云事をたよりにして、をきつの言葉をそへたる哥なり。又、ぬす人のある山はさはがしければ、風ふけばと此哥にをきてよめるなり。風の吹はさはがしき事なり。
問　まれ〳〵彼高安の都に来てみれば、はじめこそ心にくもつくりけれ、今はうちとけて手づからいゝがいとりてもりけるをみて、心うがりていかず成にけり、と云り。いゝがひとはなにものぞや。
答　いゝがひとは飯もる板の名也。此板は、いゝをもる時、かならず水にさし入て要にあふ物なれば、舟こぐかひのかたちに作たるゆへに、いゝがいとは云り。又、けことは、家の内にさだまりて有人のかず也。うつはものとはひきれ也。
問　さて、又、哥に、
君があたりみつゝをらなんいこま山雲なかくしそ雨はふるとも
と云り。是は何といふ心ぞや。
答　是は河内国にいこま山といふ山あり。此山に雲だにもかゝりぬれば、日をもへだてずやがて雨のふる山也。されば此哥よめる雨と云は我なみだのあめなれば、涙の雨はふれども雲はなたちそひそ、いこま山をだに君が行ゑそなたの山とみるばかりとよめり。

と、詳細な説明に加え、さらに高安の女とのいきさつにも言及している。そのほかに、片桐氏が島原文庫本に指摘している脱落とそれ

に対応する九大本の記事は次のとおりである。

島原文庫本	九大本
つぎにうたに五句あり。いはゆるじよ・けん（脱カ）・けう・りゆうといふ。〔二〇〇頁〕	次にうたに五句有。いはゆる遍、序、題、興、流と云。〔序〕
とふ、さて十六だんといふは、なにの物がたりぞ。ことゞくあらはしたまへ。うけたまはらん。それ（脱落カ）たゞいまいはずとも、みなをしたてゝ一ぺんきかせたてまつらんずれば、そのだんにいたらんところにてみな申べし。〔二一二頁〕	問　さて、かの十六段と云は、いつの物がたりぞ。悉あらはしなむ。うけたまはらん。 答　それは、只今いはずとも、皆をしたてゝ一ぺんきかせ奉らんずれば、其段にいたらん所は皆申べし。〔序〕
そのかたちわがおとこににず。さればなつかしきこと（脱落カ）なんじ、によし三にんありける、これもむつましともおもはざりけるに、〔二一六頁〕	そのかたち我男にあらず。さればなつかしきことなし。女子三人ありける、これもむつましとも思はざりけるに、〔序〕
かゝるあいだ、このさいし、これをきくに、かたちことなりといへども、いまは（脱落カ）なりぬ。〔二一七頁〕	かゝる間、此さいし是を聞に、かたちことなりといへども、今はなつかしく成ぬ。〔序〕
いづれも、このことばに（脱落カ。「心えぬものあり。」ナドカ）うまじかりけるをんなとは、なにごとぞや。〔二三三頁〕	いづれも此物語は不審なる中に、ことにをぼつかなし。其故は、先、詞に、うまじかりける女とは何事ぞや。〔第六段〕
されば、このことばにも、あはじともいはぬをんなの、さすがなりけるがもとには（脱落カ）。〔二四八頁〕	されば、此詞にも、あわじともいわぬ女のさすが成けるがもとには、と云り。〔第二十五段〕

このほかに、九大本と比較した場合、島原文庫本に脱落が想定される部分がある。ここでは解釈の上で重要と考えられる箇所を二三指摘しておく。

島原文庫本	九大本
①　（十九） わがいる山のかぜはやみと	我いる山のかぜはやみとは、 又男のかよふはすさまじとよ

は、またおとこのかよふは、すさまじとよめる。やまのかぜのはげしきは、すさまじき物なれば、かくたとへたり。

（二十）

こたふ、これはみなもとのいたるといふなり。〔二四一頁〕

②とふ、〈中略〉このきくは、いかなる人のせんざいにうへけるぞや。

こたふ、哥の心は、うへとうへぬる後は、はなこそちれども、ねはかれぬぞかし。

〔二六一頁〕

③こたふ、かち人のわたれどぬれぬほどのあさき江也。その江にゑんのじをそへて、あさきせのちぎりかなといへる也。そのさかづきのさらに、ついまつのすみは、たいまつのきえずみなり。〔二七一頁〕

めり。山の風はげしきはすさまじきものなれば、かくたとへたり。

問　又、かよひける男はたれ人ぞや。

答　是は源の至（イタル）と云人也。

〔第十九段〕

問〈中略〉此菊はいかなる人の前栽に植けるぞや。哥の心は何とよめるぞや。

答　染殿の御前に植ける草也。哥の心は、うへとうへぬる後は、花こそちれども、根はかれぬぞかし。

〔第五十一段〕

答　かち人のわたれどぬれぬ江とは、ちぎり也。されば、かち成人のわたるにぬれぬ程の江とは、あさき江也。其江に縁の字を制（ソヘ歟）て、あさきゑんの契り哉といへる也。其盃のさらにつひまつのすみして哥のすへをかきつくといふは、盃のさらとは、盃の尻居也。つひまつのすみとは、たいまつのきへずみなり。

〔第六十九段〕

①は、『伊勢物語の研究　資料篇』では、第十九段と第二十段の二段に分けて翻印されている。しかし、九大本を参照した場合、島原文庫本で第二十段と捉えられていた記事は本来第十九段の一部であり、島原文庫本は、脱落のため文意が不明瞭になったと考えるほうが妥当であろう。また、②は問答の体裁をとりながらも、内容が合致していなかった。③もまた、目移りによる脱文である。

一方、これらとは逆に、島原文庫本には存在するが、九大本には脱落したと考えられる記述もある。そのうち二箇所を挙げる。

一つは第四十四段、「あがたへ行人にむまのはなむけ」をした人が、島原文庫本は、

これはおはりのくにへくだる人、あがたへゆくといひたれば、ゐなかをいふとおぼへたり。この人はふぢはらのとしゆきがさいふ二人、おはりのくにへくだらんとしけるを、よびてはなむけしけるなり。

〔二五九頁〕

と述べ、藤原敏行夫妻とするのに対し、九大本は、

是は尾張国へ下たらんとしけるをよびてはなむけしける也。

とのみ記し、敏行夫妻には直接言及していない。また、第六十九段においても、島原文庫本では、

われてあはんとは、われはあるべきなかなれば、ことはりをまげて、ひだうにあはむと云心なり。おんなかた、いとあはじともおもはずとは、まさに、いたうあはじともおもはぬ也。おんなのかたよりは、なをすゝみてあはばやとおもひける也。

とふ、月のおぼろなるに、みれば、ちいさきわらはべさきにたてゝ人たてり。かぎりなくうれしくとおもひつゝ、わがぬるところにいりて、ねひとつより、うしみつまで、物がたりしてあるに、まだなにごともかたらはぬに、といへり。おさなきわらはゝたれぞ。また、ねひとつより、うしみつとは、いかなることぞや。

こたふ、おさなきわらはべはうへはらはなり。これは伊勢のかみ、ふぢはらの継蔭がむすめなり。なをば、よひとのまへといふ。ことし九さいになりける。是は、いせがおさなかりしときのことなり。また、ねひとつより、うしみつといへるは、しさい有。そのゆへは、斎宮わたらせたまふところに、ときさだまりありて、一ときを、四つにわりて、はからふに、あぶらにても、みづにてもあれ、これをもととして、その時を、はからふことあり。然るに、一時を四つにわけて、はじめの一まは、つゝみを一まきて、たつの一てんとしり、二ばんには、つゝみを二まき、たつの二てんとしり、三ばんには、三まき、たつの三てんとしり、四ばんには、四まき、たつの四てんとしるなり。かやうに、よるひる十二時を四づゝにわけて、四十八時をつくりいだす也。　（二六九頁）

と詳細に語句の説明をし、「わらはべ」が幼時の伊勢であることを述べるが、これに対応する九大本の記事は、

辰の四点（本ノマヽ　テン歟）と知り、かやうに夜る昼十二時を四づゝに分けて四十八時を作りて出す也。

と島原文庫本に指摘した箇所を欠く。

三

前節では、島原文庫本と九大本を比較し、それぞれに書写時の誤りによると思われる脱落のうち、お互いに補い得る事例を指摘したが、この作業は、その二本が同系統に属し、内容や言い回しなどに多くの一致をみることを前提としていることは言うまでもない。おそらく、島原文庫本と九大本が同じ系統の本文であることには、疑問をはさむ余地はあるまい。ところが、ここに一つの問題がある。奇妙なことに、この二本は、同じ章段について異なる解釈を持つ場合がある。

その一つが、第五段に関する記述である。業平が二条の后のもと

に「ついぢのくづれより」忍んでいくのを黙認していた「心有人」が、島原文庫本では、「姫君のおとゝ、くにつね」であるのに対し、九大本では、「姫君の弟遠経」になっている。ちなみに、この「心有人」を、九大本同様「遠経」と解釈するものには、書陵部本『知顕集』[12]がある。

もう一つは第八十段の記事である。島原文庫本は、

とふ、むかし、男、おとろへたるいゑに、ふぢの花うへたる人のありけり。やよひのつごもりに、雨そほふるに、おりて人のもとへたてまつりける。

ぬれつゝぞしゐておりつるとしの内に
春はいくかもあらじと思へば

といへり。此哥の心はいかにとよめるぞや。又、おとこはたれぞや。

こたふ、雨をば、ぬれつゝといひ、藤をば、しゐておりるといひて、雨とも藤ともいはざるは、詞書にゆづればなり。三月のつごもりを、春はけふのみとよみては、曲なし。春はいくかもあらじといふ、尤おもしろきなり。おとこは業平の事也。

〔二七四頁〕

と藤の花を折った人が業平である事を述べるだけで、「おとろへたるいゑ」が誰の家か、あるいは藤の花を誰に奉ったかにはふれない。これに対し、九大本は、

問　むかし男をとろへたる人の家に藤の花うへたる人有けり。それを、三月晦日に雨のそをふりけるに、折て人のもとへ奉りける、

ぬれつゝぞしゐて折つる年の内に春はいく日もあらじとおもへば

といへり。此哥の心はいかにとよめるぞ。又、男は誰ぞや。

答　是は紀有常が家也。をとろゑたるとは、まづしく成ける也。又、藤の花をある人は、業平也。奉る所は、染殿の后の御もと也。春はいくかもあらじとは、今日は三月晦日なれば、今はことしの春の一日もあるまじきと也。

と、「をとろへたる人の家」が紀有常邸であること、藤を折った人が業平である事を述べた上で、その花を染殿の后に奉ったことを重ねて記す。ここでは「哥の心」と「男」が誰かを問題にしている「問」に対し、過剰ともいえる「答」である。ちなみに、この解釈は、『知顕集』のいわゆる末書とされる『和語知顕集』[13]と一致している。

同系統本文におけるこの解釈のちがいをどう捉えるか。どちらの本文が古形をとどめているのか。現段階では判断の難しい問題である。

五

これまでは、九大本『知顕集』のいくつかの特徴について、同系統に属する島原文庫本と比較しつつ、述べてきた。しかし、九大本について考察する場合、特筆すべきは『伊勢物語』第四十九段に関する次の記事である。

問　むかし男いもうとのいとをかしげなるを、琴をしらぶとてみおりて、と云なり。おかしげ成とは、何と心うべきや。

答　おかしげ成とは、よき也。物のおかしきとは、心にかなひて興有事也。　〔第四十九段〕

そもそも、書陵部本系統、続群書類従本系統を問わず、『知顕集』には、わずかに前にふれた『和語知顕集』が内容において九大本とまったく異なった注を加えるのを除き、第四十九段の記事が認められない。つまり、今日この本文は九大本にしか伝わらないことになる。

ところが、この本文は九大本に限っての独自本文ではなかったらしい。今日さほど注目されないが、近世において、九大本と同様の四十九段を持つ『知顕集』の存在が一定の人々に知られていたという事実を示す記事がある。

むかし男いもうとのいとおかしげなるが琴ひきけるを見をりて臆断に異腹のいもうとは后にたゝせたまへることもありつるよしをいひてさだめいへる事どもいとよし。さてこゝなるいもうとも異腹にいあいあらんとやうにいへり。いとおかしげなるとは艶にうつくしきことなり。

○おかしげなるが琴ひきけるを　知顕抄の古写本の一本にかくあるにしたがふ。

（文化九年自序　藤井高尚『伊勢物語新釈』四十八段）

さらに、この本と相前後して出版された屋代弘賢の『参考伊勢物語』にも次のような記事がある。

四十九　ねよけ　ことをしそ

うらわかみねよけにみゆるわか草を人のむすはんことをしそおもふ。六条宮御本と知顕抄とにむかし男いもうとのいとおかしけなる琴をしらふとてみをりてと有。これにてねよけのことはことをしそこ詞よくきこえたり。

（文化十年自序　屋代弘賢『参考伊勢物語』四十九段）[14]

なお、屋代弘賢が所持した『知顕集』には九大本と同じ奥書を持つものがあったことが、大津有一氏によって指摘されている。[15] この二書にさらに、『参考伊勢物語』を用いて橘守部があらわした『伊勢物語箋』を加え、これらはいずれも第四十九段に『知顕集』を引用する点で共通している。しかも、一見してわかるように、彼らが引用した『知顕集』第四十九段の『伊勢物語』本文は、『伊勢物語新釈』に「琴ひきける」とするのを、『参考伊勢物語』が「琴をしらぶ」と述べるというわずかな違いはあるが、九大本の伝える本文とほぼ同じである。

この三人の交友とその著書の相互関係については、すでに田中宗作氏の指摘するところだが、[16] いかにそれらが緊密であったとはいえ、彼らが一様に第四十九段に『知顕集』本文を引用するにあたっては、一応の根拠があったはずである。

その理由を藤井高尚は次のように述べる。

琴ひく事なき本は源氏物語に此事をいへるにたがへり。角（ママ）総巻

に在五が物語をかきていもうとにきんをしへたる所の人のむすばんといひたるを見てとあり。もの語絵かく人の琴ひきけるを見をりてとはをしへなどするさまなりとこゝろえてさやうにかけるなるべし。きんをしへたる所とは絵やうをいへる詞なり。

（『伊勢物語新釈』）

第四十九段については、高尚が言うように、古くから『源氏物語』総角の巻の記事に基づいて、業平が妹に琴を教える場面を伝えた異文の存在が問題とされてきた。[17]

『源氏物語』総角どおりの第四十九段を持つ『伊勢物語』本文は、今でこそ、最福寺本、時頼本、伝為頼本、伝後醍醐天皇宸翰本などが知られるが、中世から近世にかけてのそれらは人々からあまりにもかけはなれた存在だった。先に挙げた『参考伊勢物語』に屋代弘賢は、この第四十九段本文を伝える本として「知顕抄」と「六条宮本」を並記するが、この六条宮本は今日で言うところの時頼本にあたり、特殊なものと言えよう。[18]『源氏物語』の記事に合致する『伊勢物語』は、当時一般には知られていなかったのである。このような状況の中で『知顕集』が『源氏物語』総角に記すとおりの『伊勢物語』第四十九段本文を伝える意義は大きい。高尚らは、『源氏物語』の記述に基づきこの本文を評価し、その著書に『知顕集』を引用したのである。

そして、今日、この第四十九段を直接伝える点において、九大本『知顕集』は貴重な資料と言うことができよう。

六

最後に、簡単に書誌についてふれておきたい。九大本は、縦二十七・七センチ、横十八・八センチ、楮紙袋綴の一冊本である。外題は「知顕集上下」、内題に「伊勢物語知顕集」とある。墨付九十丁。奥書に「元文庚申如月廿日写之　水竹居作禄」、書写の際の奥書には「宝暦十二巳五月廿日写之畢　紙員九十葉」。続群書類従の編纂より、約半世紀ほどさかのぼった頃の写本である。なお、奥書は焼失した徳島光慶図書館旧蔵本（屋代弘賢旧蔵本）と一致する。一丁オモテに「馬詰文庫」「音無文庫」「九州帝国大学図書印」の蔵書印、さらに、書写奥書の下に「矢部」の印がある。「馬詰文庫」[19]は土佐の著名な堂上派歌人馬詰親音（一七四八～一八〇八）のもの。

（1）片桐洋一氏『伊勢物語の研究　資料篇』所収。

（2）この点については、松田武夫氏「伊勢物語知顕集の再吟味」（「文学」昭和十一年五月号）に詳しい。

（3）以下本文の引用は寛文元年板『拾穂抄』（九州大学国語学国文学研究室蔵）によった。

（4）以下本文の引用は文政元年板『伊勢物語新釈』（九州大学附属図書館蔵）によった。

（5）また、石上宣続の『卯花園漫録』（文化六年自序　「日本随筆大成第二期」十二所収）は、源氏物語や徒然草の注釈書に並んで、

○伊勢物語は、

知顕抄〔不知〕　初冠〔同断〕

逍遥院殿家説　惟清抄〔舟橋三位環翠軒〕

肖聞抄〔牡丹花老人〕　闕疑抄〔細川玄旨〕
抒海〔了意〕　盤斎抄〔踏雪〕
山口記〔宗祇〕　秘訣抄〔高田宗賢〕
拾穂抄〔季吟〕　愚見抄〔一条禅閤〕
真名伊勢物語〔六条宮御撰と云〕

と、「知顕抄」を伊勢物語注釈書の一つに挙げている。

（6）九州大学蔵『知顕集』は、「文献探求」第二十八号及び二十九号に全文を翻印、掲載した。以下本文の引用はこれによった。

（7）「続群書類従」十八輯上所収。

（8）注1に同じ。

（9）片桐洋一氏『伊勢物語の研究　研究篇』。

（10）右に同じ。

（11）以下島原文庫本の引用は、注1による。なお、引用の際にはその頁数を示した。

（12）注1に同じ。

（13）天理善本叢書『和歌物語古註集』所収。

（14）引用は文化十四年刊『参考伊勢物語』（九州大学附属図書館蔵）によった。

（15）大津有一氏『伊勢物語古註釈の研究』。

（16）田中宗作氏『伊勢物語研究史の研究』。

（17）通行本の本文は、

むかし、おとこ、妹のいとおかしげなりけるを見をりて、うら若み寝よげに見ゆる若草をひとのむすばむことをしぞ思（ふ）

と聞えけり。返し、

初草のなどめづらしき言の葉ぞうらなく物を思（ひ）ける哉

（日本古典文学大系『伊勢物語』四十九段）

とし、『源氏物語』総角に言うような琴を弾く描写はない。

（18）「時頼朝臣の本なり。かた仮名にて書て奥に具平相傳本と朱もて其記寛元貳年中秋上六日主平時頼と筆もてしるしたり。六条宮の御名はみえたれど真名本とはおなじからず。」

（19）中野三敏先生のご教示による。